

Title	浅岡隆裕著：『メディア表象の文化社会学：<昭和>イメージの生成と定着の研究』：(ハーベスト社 2012年菊判 292頁 3,360円)
Author	大石, 真澄
Citation	市大社会学. 13巻, p.63-67.
Issue Date	2012-12
ISSN	1345-8019
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学社会学研究会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

浅岡隆裕著

『メディア表象の文化社会学
——〈昭和〉イメージの生成と定着の研究』

(ハーベスト社 2012年 菊判 292頁 3,360円)

大石真澄

「懐かしい」という感覚は必ずしも実際の体験に基づくわけでは無い。現に自らが存在もしなかった時代の過去の表象に触れて「懐かしさ」を感じる経験を誰でも持っているものである。近年、特に1990年代後半から現在に至るまで〈昭和〉ブームと呼ばれる流行現象が起きている。この現象においては、懐かしい、という感情には当事者性は要求されない。そればかりかこの感情は過去のフィールドにその共有を行う新規の参入者を、社会的な流行現象となるほどまでにいとも簡単に招き入れる。過去の想起にあたってその想起自体に「既得権」をもつはずの過去の当事者と同等に、その快楽を非当事者も持つことが可能になるのである。私たちはなぜ実体験もない、つまり自らのものではないはずの過去をその過去の当事者と共有し、「想起」しているのだろうか。こうした懐かしさの感情は集合的記憶やノスタルジアといったキーワードをもとに、長く社会学で扱われてきたトピックである。これらのキーワードのもとでは、記憶の想起、あるいは再構成にあたってメディアが大きく作用することが示唆されてきた。本書はこれを手がかりにして、昭和30年代に関するメディア表象とその受容から、〈昭和〉ブームの実際を観察しようとする試みである。

本書では、まず序論にあたる「はじめに」で本書の問題意識とそれを対象とするにあたってどのように本書が構成されるかについて述べられる。ここで明記されているように1～5章でメディア、記憶研究に関する理論について詳細に検討され、6～10章では前半で検討された理論を用いて事例分析が行われることになる。この時点である程度結論めいたことを書いてしまえば、本書の価値・意義は前半の理論検討に大きく重点があると考えられる。以下より章立てに沿って、内容を見ていくことにする。

第1章では導入としてこの〈昭和〉ブームがどのような特徴を持ち、どのような視点から社会学的研究の対象となり得るかが検討される。筆者は最初に現在の〈昭和〉ブームが実質的に昭和30年代ブームとして、多様な解釈可能性の中から選び取られているという視点を得る。なぜ「昭和」を語る際には様々な言説の可能性はあるはずなのに、特定のパターンに収斂したのか、これを解くために持ち込まれるのが、構築主義への依拠と集合的記憶の概念である。前者は、メディアが昭和30年代に肯定的意味づけを行う「送り手」のプロセスを追うものであり、後者はそこから影響を受けて多様な可能性の中から、ある特定のパターン

の「想起」を選び取る「受け手」のプロセスを追うことに対応している。ここでは「ヘゲモニー調達という抗争の中で、記憶や想起の枠組みの再配置が行われ続けていること」(30頁)を認識することの重要性が強調される。

こうしたヘゲモニー調達抗争の中で、メディアイメージの送り手と受け手の間での諸相を明らかにするために必要な理論の検討が第2章と第3章で行われる。メディアイメージは、常に相互作用によって作り替えの過程にあるものとしても把握され、人びとの行動を動機づけるリソースとして働いていると考えられる。それは行為の諸可能性の「複雑性を縮減」(43頁)するという意味での機能である。しかしメディアの特性から、両者のパワーバランスは不均等である。その中で受け手はどのようにメディアを相対化して捉えているのだろうか。筆者はこの問題を考える上で有効な概念として「解釈共同体」に着目する。受け手について社会的に考えるとき、その個別性をもたらすのはより大きな社会的枠組みであり、それゆえ集合的営為として「解釈」行為を考える必要がある。この概念のもとでは、受け手は自らの所属する共同体のコードに沿って解釈を行うため広い集合的解釈についての理解が可能になり、またどの共同体に属するかは状況依存的に決定されるという前提によってより広い論の可能性を保証することになる。

現代の社会では社会を分節しているものは多くあるが、その一つが言説である。言説はそれが広がることで、そこで示されている集団が発見されるという側面を持つ。第4章では、解釈共同体自体の分節化を解明する上での言説分析の有用性を確認する。筆者は、「公開を前提として作成された表現物」(76頁)として措定されるメディアテキストが言説を作り出すとする。言説は、元の文脈を離れて自律していくようなプロセスにおいて拡散し、それとともに社会が分節化されていく。こうしたあり方を分析するにあたって適切な手法とはどのようなものだろうか。ここで比較されるのは、量的、仮説検証的なものとしての内容分析と、質的、個性記述的なものとしての言説分析である。この比較から、前者の手法では、研究対象のカテゴリズの時点で、内容の意味体系に研究者自身が意味を付与してしまう危険性があると指摘される。一方で後者においても、佐藤俊樹の指摘に沿って、その手法自体のア・プリオリな性格から由来する手続きの非厳格性ゆえの恣意化、信頼妥当性や一般性の水準確保の難しさが挙げられ、これを克服する手立てとして、社会史研究との接続が提案される。

本書で主題になっている〈昭和〉ブームでは、想起したことや懐かしがっていることを叙述するという営みもまた生まれる。受け手側の行為として、検討の対象とされるこうした叙述は一方で、ある種の現代史・同時代史を紡ぎ出す行為でもあるのだ。第5章ではこの現代史・同時代史を叙述すること自体に含まれるポリテクスをどう扱うかという問題に照準する。この叙述はインターテキストチュアリティの中で構築されているものとして捉えられ、その叙述のよりどころになる資料自体の成立のコンテクストを問う事の重要性が強調される。

これより後の後半では事例分析が行われる。第6章では「所得倍増」を巡るメディア言説を取り出し、その変容を言説自体がもたらした結果を通して記述する試みを行う。筆者はこの分析にあたってパンとコシツキのフレーミング・アナリシスという手法を援用する。この

手法では、報道は戦略的に構築される営み提示として考えられており、本章での研究が対象言説の論理構造を支配するポリティクスの変遷、すなわち「どのような言説がドミナントになるのか」に関しての相互作用プロセス観察になり得ているところに特に注目できよう。

第7章では、なぜ<昭和>ブームが「昭和30年代」というイメージ表象に収斂していったのかという問いを、メディアを通じた間接経験と、その経験の解釈に用いられる解釈共同体の相互作用から明らかにする。ここで筆者は昭和30年代をテーマにした雑誌見出しの定量的なデータから、昭和30年代が「牧歌的な昭和の香りは失われていく」(164頁)という大きなストーリーの共有の下に言説配置されて「選び取られている」のだという結論に至る。

続いて第8章と9章では、こうした言説提示のポリティクスと解釈共同体が「共犯者」として昭和30年代イメージに寄与している実際の現場である、展示イベントと博物館での展示について検討を行っている。いずれも送り手たる主催者にインタビューを行い、まず送り手の「意図」について明らかにしている。第8章では会場に残された感想記入用ノートからその反応を追い、送り手の企画意図と受け手の解釈が一致する現場を明らかにする。一方で博物館の展示では、こうしたイメージや記憶に留まっているはずの「昭和30年代」が「正史」として扱われるようになる点に注意を向ける。博物館は集合記憶を「歴史」に変換する装置なのだ。正史として扱われるが故に「唯一の事実」が選び取られる必要があり、それゆえに固定的なイメージが受け手により強固に定着し、それを前提として展示が再生産されるという、S.ホールのEncoding/decoding概念で示されるオートポイエティックな循環図が鮮やかに描かれる。

最終章である第10章では、昭和30年代のポジティブなイメージが受け入れられる素地として「日本人ないしは日本社会が”劣化”している」(245頁)という「日本人劣化言説」の存在を見出し、これがメディアでどう扱われたか、広がっていったかに関して量的調査を行うことで受け手の全体的傾向を明らかにする。この調査によって筆者の本書を通しての前提である「メディアを通じた昭和解釈」が実際の物として明らかになる。またこの現在の昭和ブームが1990年代後半から現在に至る点も証明できたと言えよう。本章によって、<昭和>ブームは社会が劣化して向かうべき方向性を失う中で「一次的な避難場所＝シェルター＝ユートピア的なもの＝ファンタジーとしての昭和」(261頁)として機能していることが明確に示される。

本書では、メディア研究における様々な道具が示される中、<昭和>ブーム分析のために何をどういう理由で選ぶかが余すことなく丁寧に記述されている。これに伴って、現在のメディア研究においてどういった方法論が選択可能となっているかが、未邦訳のものも多数含めて紹介されており、最新の研究動向を知ることができる。この作業の中で解釈共同体概念を、どのようにメディア表象研究の中で用いるかを明確に示した功績は大きい。それは本書で対象とされる、メディアと記憶に関する二つの研究の抱えている問題に関係している。一つはメディアの表象と受け手との関係を単一的に捉えられるのかという問題だ。そしてもう一つは記憶の研究にあたって、記憶の蓄積ないし想起いずれにも関与するリソースを、集

合的な水準で決定しづらいことである。本書でも指摘されていたとおり、そもそも M. アルヴァックスの定義に沿えば、記憶ないしその想起は集合的営為として考えられる部分が多い。そのため、これらを個人の行為や意味づけに還元せず集合的なものとして扱うための装置が必要であった。解釈共同体は、第一に解釈に関わる行為を集合的営為として取り扱うための装置である。それと同時に、「解釈」においてそれが一方向の因果関係としてではなく、多数の意味可能性の中から「複雑性の縮減」(43頁)を経た結果であると考え、これを行うための概念装置としても用いられる。つまり本書では、解釈行為が「意味の選択」として想定され、その上でその選択行為は集合的営為として取り扱われる。この二つの段階を包摂する装置として解釈共同体が用いられるのである。

一方で、解釈共同体概念を用いた本書での事例分析では、構築主義をメディア表象とその解釈の把握に敷衍することの困難性が大きいことも見て取れる。本書のような、解釈共同体をおいたメディア表象とそれを巡る解釈活動モデルにおいては、契機を「読み」に求めるとすれば、解釈共同体自体の出自が問われなくなってしまう。ところがそこで解釈共同体の形成の変遷自体を含めて考えようとすれば、その開始点を決定することが非常に困難になる。おそらくこれを解決する糸口として、第4章で社会史との接続が提唱されているのだろう。ところがこの「社会史」が、対象とするメディア表象に付与された「意味」自体の変遷を指すのか、あるいは意味付与行為にかかわる知識社会学的研究の考慮という意味を指すのか記されていない。これらを踏まえると、〈昭和〉ブームの説明モデルが、そこに關わるものすべてが変化しながら同時に連関することを想定しきれていないところに問題があるように見える。〈昭和〉イメージ自体も変遷をしている、というのが筆者の主張のはずであるが、〈昭和〉ブームは一貫して「昭和30年代のポジティブなイメージの想起」という固定的な役割を付与され、これを基に他の部分の動きが説明されているのである。これらを解消する方法は、解釈共同体もメディア表象もそれ自体を、おのおの一つの自律した機能体として捉え、機能体同士がどのように連動しているかに着目することではないだろうか。解釈共同体と受け手送り手の間に相互行為があるとすれば、メディアの意図からの解釈という一方向の因果のみではそこで形成されるものの姿は描ききれない。メディア表象が現実から構成される場合もあるのだ。この相互作用において各々の主体がその作用とは別に、変化・作動をしていることを踏まえることでのみ、構成されているものの実際が見える。さらに解釈共同体概念を、複雑性縮減装置として単純に扱うにあたっては問題がある。本書の大きな特徴の一つは、メディアの解釈が実際に別の集合的行為を引き起こしている例についての研究である点だ。しかし、そもそもメディア表象を受けて起きる反応が、解釈に伴った何らかの表出される「行為」であるのか、単なる記憶の想起であるのかも——想起が行為の下位概念であることも踏まえた上で——わけて考えることはできない。その意味で解釈共同体たる複雑性縮減機能装置は、本書で扱う現象それ自体が、「メディアによって引き起こされて、〈昭和〉ブームという形で収斂した」という結果においても作用していることに留意する必要があるのだ。この視点を保持するためには、メディアというものの、そもそもある程度決まった行為を引

き起こしやすいという性質への注目も欠かせないだろう。

本書は筆者が数年にわたって研究成果を著した、複数の論文を再編成したものである。筆者の本研究に対する集大成とも言えるものであるが、再編成したものであるゆえか論文全体の統一性に今一つ欠けるところがあり、重複する主張があったり、細かい論理の循環が散見されたりする。またもう一点、事例の参照数があまり多くない点が指摘できよう。昭和ブームが、その対象を昭和30年代に収斂させていく様相を著しく見せるようになったのは2000年代初頭である。この時期の昭和ブームについての当の史料を言説分析の対象としていないため、肝心の言説配置の上での——昭和イメージが昭和30年代のものへと収斂していくという——「複雑性の縮減」の詳細な作動を捉えることなく研究が閉じられてしまっている。しかし、これらの欠点を持ちながらも本書はより抽象性の高い事例を持たないような理論で既に示されていた表象と解釈の循環図を、実際の事例を前提とした受容観察に用いる理論へと解きほぐすような研究として特に評価できよう。何よりも本書で読者に提示されているのは、メディア研究が自明としてきた、因果をもってそれを捉えようとする受容の図式を問い直すという今後の指針であり、そこからメディア研究が照準すべきものが見えてくる。

大阪市立大学大学院前期博士課程

おおいし ますみ